虹（にじ） 地域再生へ流れ生む

⑱ ジソウラボの挑戦

打ち合わせをする島田さん（左手前）らジソウラボのメンバー

「木彫のまち」の人通りに変化が表れ始めたのは、近年のことだ。真宗大谷派の古刹（こさつ）、井波別院瑞泉寺の門前町として発展してきた南砺市井波地域。彫刻工房が軒を連ねる石畳の通りに、若者や外国人旅行客の姿が目立つようになった。

空き家や空き店舗を活用し、パンやコーヒー、クラフトビールなどの店が相次いでオープン。個性的な商品やおしゃれな店構えが人気を集め、中には年間１万人以上が訪れる店もある。

人口減少が進む中で、移住してきた若者たちが起業して人を呼び込む。そんな流れが人口7600人の地域で生まれている。

仕掛けたのは、地元の30～40代の経営者らが2020年に設立した一般社団法人「ジソウラボ」。井波での起業や移住をサポートし、空き家や公共交通などの社会課題に取り組む団体にも関わっている。代表理事の島田優平（しまだゆうへい）さん(48)＝島田木材社長＝は「井波再生のきっかけとなったのは、18年の日本遺産認定です」と振り返る。

◇

日本遺産は、地域の文化財をストーリーとして文化庁が認定する制度。観光振興や地域活性化を目的とし、認定から３年間は事業者に補助金が出る。

井波地域は17年に申請したものの、落選。再挑戦に向け、地元で「井波日本遺産推進協議会」が立ち上げられた。構成するのは地域の各種団体の代表者で、年配者が中心。若い世代の意見を事業に生かすため、協議会にワーキンググループ（WG）を設けた。座長に抜てきされたのが、となみ青年会議所（ＪＣ）の理事長を務めていた島田さんだった。

島田さんは、旧井波町で林業を営む家の三男として生まれた。祖父の故・英治（えいじ）さんは県議会議長などを歴任した名誉町民。父の勝由（かつよし）さんは南砺市議会議長を務め、地方自治に深く関わってきた家系に育った。

小学生から野球に打ち込み、砺波高校では野球部主将。東京農業大で林業を学んだ後、奈良で江戸時代から続く林業家の下で働いた。県職員に転職し、自然保護課で山小屋や登山道整備に関わる人たちと接する中で、地元の山を支えることに尊さを感じた。「自分にしかできない役割は何か」と考え、30歳で家業に入った。

となみＪＣの理事長時代は、旧井波美術館などの利活用計画の立案に力を注いだ。だが、理事長の任期は１年間で、計画はＪＣとして実現に至らなかった。「計画をつくっても、実行しなければ地域は良くならない」。そんな思いを強くしていた時に舞い込んだのが、日本遺産の話だった。

◇

島田さんは若手の彫刻師や経営者、主婦、コスプレイヤーら20～30人に参加を呼びかけ、WGの活動をスタートさせた。メンバーから出てきた意見は「観光客をたくさん呼ぶのは、井波らしくない」「住んでいる人や職人が生活したいと思える場所にしたい」。観光客の誘致を目指す協議会側と意見は食い違った。

当時、協議会には外部のコンサルタントが作成した計画案が示されていたが、島田さんたちはそれにも異を唱えた。案には、インバウンド（訪日客）誘致など他の地域でも当てはまるような言葉が並び、「井波らしさがない」と感じた。しかも、各事業の受注先は県外の業者。予算は消化しやすいだろうが、地域にとって意味があるのか疑問だった。

「人任せにするのじゃなく、自分たちの事業として捉えていきたいんです」。島田さんは協議会に訴えた。WGには事業を自ら企画し、実行できる人材がいると確信していた。協議会長の三谷直樹（みたになおき）さん(72)は「われわれにも『本気度を見せてください』と迫るような熱意を感じました」と振り返る。

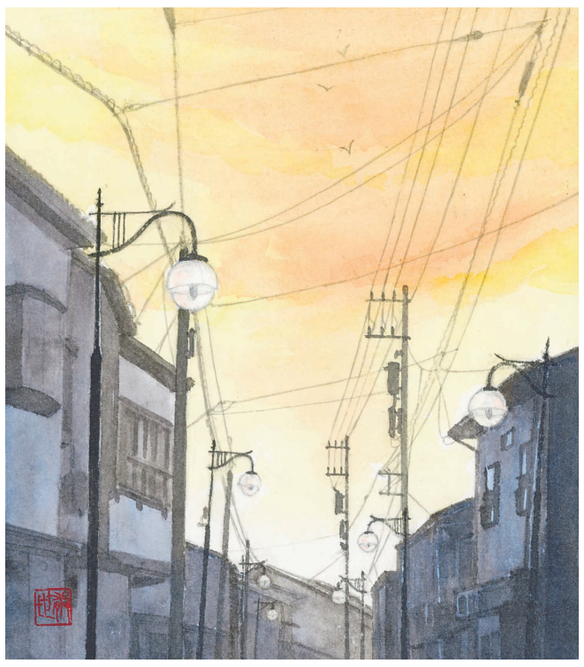
◇

島田さんが声をかけた一人が、建築家の山川智嗣（やまかわともつぐ）さん(43)＝富山市出身＝だ。16年に中国の上海から井波に拠点を移し、「職人に弟子入りできる宿」をコンセプトにした宿泊施設を開業。地域に新たな風を起こしていた。

行政的なまちづくりに興味はなかったが、「仮に日本遺産認定に漏れたとしても、一緒に活動していこう」と若者たちに呼びかける島田さんの言葉に共感。まちづくりの議論に加わった。山川さんが強く提案したのが「人づくり」だった。

WGのメンバーは地域のアイデンティティーを探る中で、人づくりに取り組んできた郷土の歴史に目を向けた。井波彫刻は、江戸中期に瑞泉寺が再建される際、京都から派遣された彫刻師が地元の大工たちに技法を伝えたのが始まり。その技術が受け継がれ、今も150人の彫刻師が活躍している。

WGは、人材を育て輩出してきたことが井波の特徴だと捉え、現在の担い手不足の課題解決につなげる人材育成プロジェクトを提案。協議会は日本遺産事業の一つに盛り込んだ。



「ふしき下町」広田郁世

◇

島田さんは、WGに入る彫刻師の前川大地（まえかわだいち）さん(48)、山川さんと共に継続的な活動ができるチームづくりに取り組む。総合建設エンジニアや石材店経営者、デジタル分野に精通した出身者らを加えた計７人で設立したのが「ジソウラボ」だ。

名前には「土『地』の力を継承し、『自』らの力で『創』造し、『自』立して『走』り出す」という意味を込めた。メンバーは基本的に増やさない。人数が膨らめば、判断が遅くなり、仲たがいしやすくなるためだ。メンバー同士の話し合いや勉強会を重ね、目線を合わせることを徹底した。

ジソウラボのミッション（使命）は「つくるひとをつくる」。WGが提案した人材育成の事業を実行に移した。メンバーが地元で暮らす中で欲しいと感じる店や、担い手が不足している業種をピンポイントで募集。メンバーが面接し、採用が決まれば、物件を一緒に探し、商売のアドバイスをする。地域からの苦情も受けることもあれば、開業までメンバーの会社で雇用することもある。

飲食店に加え、井波彫刻に関わる糸鋸師（いとのこし）や地域商社の人材も確保。さらに公共交通の実証実験を行う「イドウラボ」、空き家をマッチングする「アキヤラボ」などの関係団体の設立を後押ししてきた。

アキヤラボによると、この10年足らずの間に、井波で空き家や空き店舗を活用して開業した店や事業所は60件以上。今や、ジソウラボのメンバーが関わっていないところで、人が人を呼び、店が店を呼ぶ流れが起きている。

◇

島田さんは自他共に認める「調整型リーダー」。自分の理想はあるが、それを貫くことよりも、周りの人と共感できることが大事だと思っている。

小中高と同級生だった前川さんは、島田さんについて「偉ぶらない性格は昔から変わらず、意見を言いやすい場をつくっている」と話す。山川さんは「誰にも陰口を言われないという珍しい人」と評する。

一方、島田さんにも悩みはある。「調整型は成果を出すのが難しい。何となくまとまるけど、結局は形にならないという人生を送ってきた。だから、日本遺産の事業は、僕にとってのチャレンジだった」。今は、仲間たちと事業を実現していく活動が楽しい。

時代は常に変わっていく。地方への移住の流れはコロナ禍以降は鈍くなり、ジソウラボと似た事業に取り組む地域も増えた。島田さんは「僕らもアップデートしないといけない」と言う。それと同時に、次の世代の台頭に期待を寄せる。「バトンタッチを早くできればできるほど、明るい未来が開けるんじゃないかな」と島田さん。それが何年先か、何十年先になるのかは分からない。だが、その時が「つくるひとをつくる」サイクルができた証明になると思っている。

まちづくりで若手に意見を聞く取り組みは、どの地域でも行われていますが、アイデアの実現が難しい。井波は日本遺産のタイミングがうまく重なった部分はあるものの、偶然を必然に変えたのは島田さんたちの知恵と覚悟にあるように思えます。

「虹」第９集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第９集『虹　海の匂いを覚えている』は2022年９月から24年５月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911 高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766－25－7773
mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は11月１日（土）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局